

夏肥施用で温州ミカンの収量が増加

【背景・目的・成果】温州ミカンの国内需要が減少する中、淡路地域では、もぎ取り、オーナー制、直売といった消費者と対面した販売方法が広がっており、毎年安定した果実の供給が求められています。しかし、ミカンでは、一年ごとに収量が増減する隔年結果が問題になっています。

そこで、夏肥施用による隔年結果軽減効果について調査したところ、5～6月に夏肥を施用することで品質が低下することなく収量が増加することが分かりました。

表1 試験区の構成（早生温州、窒素成分kg/10a）

試験区	春肥 3月下旬	夏肥 5月下旬	秋肥 11月上旬	計
夏肥区	6	8	6	20
慣行区	10	—	10	20

「慣行区」：春肥と秋肥にそれぞれ窒素成分量で10kg/10aを施用。

「夏肥区」：春肥と秋肥の施用量を4kgずつ削減し、削減分を5月下旬に夏肥として施用。

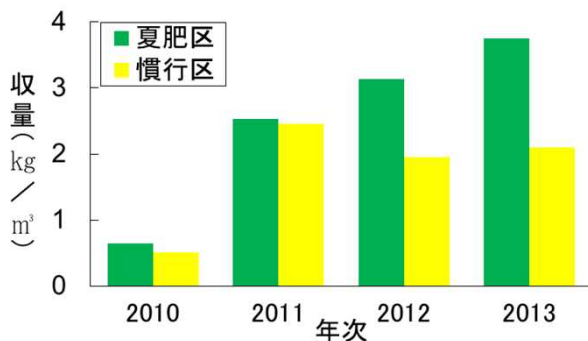


図 夏肥施用と樹冠容積当たりの年次別収量
※夏肥は2011年から施用

表2 夏肥施用と着色期（2011-2013年）

試験区	着色始期	完全着色期
夏肥区	10月14日	11月11日
慣行区	10月14日	11月12日

注) 着色始期：果皮の緑色の抜けが1割に達した日

完全着色期：樹全体の果実が完全に着色した日



写真 温州ミカンの着果状況（収穫直前）

「表年」(写真左)は当年の収量は多いが、適切な管理をしなければ、翌年の着果は極端に少なくなり、「裏年」(写真右)となる。これを「隔年結果」といいます。

両区とも、「夏肥区」に夏肥の施用を開始した2011年以降、収量の年次変動は小さくなり、隔年結果は収まっています。「慣行区」に比べ「夏肥区」の収量は多く推移するとともに、増加傾向を示しました。

表3 夏肥施用と果実品質（2011-2013年）

試験区	浮皮程度	糖度 (Brix)	酸含量 (%)
夏肥区	0.4	10.2	0.77
慣行区	0.4	10.2	0.75

注) 浮皮程度は無(0)、軽(1)、中(2)、甚(3)の4段階評価の平均値

着色期、果実品質(浮皮、糖度酸含量)は試験区による差はみられません。

窒素の遅効きによる着色不良や浮皮の発生増加といった品質低下は起こりません。

【技術の活用】

夏肥の施用と後期重点摘果および夏秋季の20mm/10日のかん水を組み合わせることで、糖度が高い高品質果実の生産を行うことが可能です。